

見えざる目的

エドモンド・バーク曰く、

古い制度はその効果によって吟味される。民衆が幸福であり、団結しており、富んでおり、強力であれば、我々はその他をも推して知る。我々は善いものが導き出されるところのものを善いものと結論する。古い制度には、その理論からの逸脱に対して様々な匡正手段が見出された。実際このような制度は様々な必要と便宜との結果である。これらの制度はしばしば何らの理論にもよらずに（無意識的な行為の結果として）構成され、理論はむしろ（結果としての）制度から引き出されるのである。これらの制度において我々はしばしば、元来の計画であったと想像されるものに対して手段が完全に調和していないように思われるのに、目的が最もよく達せられているのを見る。経験によって教えられた手段の方が本来の計画において工夫されていた手段よりも政治目的に適することもあるであろう。このような経験によって教えられた手段は更に最初の構成に反作用し、時にはこのような手段の出発点だと思われる計画そのものを改善する。（出典：バーク『フランス革命の省察』、みすず書房、217～218 頁に該当。）



見えざる目的

【目 次】

1 人間の心の構造（心的秩序）について	・・・ 3 頁
1-1 物理的秩序と心的秩序——客観的世界と主観的（心的）現象	・・・ 3 頁
1-2 人間の心的秩序の位相同型性について	・・・ 5 頁
1-3 ヒュームの反合理主義的道德論	・・・ 6 頁
1-4 人間行動のミステリー（不思議）について	・・・ 7 頁
2 心の位相同型性が生み出す、社会の自生的秩序	・・・ 9 頁
2-1 社会の諸制度と形成物の生成について	・・・ 9 頁
2-2 あらゆる人間性の抹殺を目論む邪教——「共産主義」	・・・ 11 頁
2-3 合「目的」的な自生的秩序について	・・・ 13 頁
2-4 非・合理的な超・合理主義	・・・ 14 頁
3 結 語	・・・ 16 頁
【附録】 位相同型性（イソモルフィズム）について	・・・ 16 頁

1 人間の心の構造（心的秩序）について

1-1 物理的秩序と心的秩序——客観的外界と主観的（心的）現象

我々人間の生活する世界は、物と物との関係、人と物との関係および人と人との関係から構成されている。物理学に代表される自然科学は、我々の外的世界を、観察される物と物との関係（物理的秩序）で定義する。

他方、人と物との関係および人と人との関係は物理的秩序のみに基づいて構成されるのではなく物や人（あるいはそれらの関係）を我々の感覚経験を通して外界を心に再現する秩序（＝心的秩序）に大きく依存している。

例えば、美しい景色や絵画などを見れば、我々の大部分が同じように「美しい」と感じるのは、我々の心（心的秩序）がそれを「美しい（もの）」と感じる（＝心で分類する）から美しいのであり、それは物理学が多様な光の原因を波長として解明したからではないし、光の物理学的な波長・均質性・強さの特性と、視覚経験による色相・彩度・明度の次元の対応関係がすべて解明されたとしても同じことであろう。

また、我々が断崖絶壁の上や東京スカイツリーの展望室などから眼下の景色を見れば、「高くて怖い」と感じるのも、古今東西すべての人間に共通する感覚であり、それはニュートンが万有引力の法則を発見したからでも、アインシュタインがそれを相対性理論で塗り替えたから「怖い」と感じるようになったのでもないのは明らかであろう。

もう一つだけ例をあげれば、野球をしている二人の人間がキャッチボールをしたり、バットでノックされたフライボールをキャッチしたりできるのは、彼らが相手の動作や打たれたボールの動きを感覚経験によって学ぶからであって、投げられた（あるいは打たれた）ボールの初速度、仰角などから放物線の軌道を瞬時に頭で計算するからではない。

なお、**私** [= **ブログ作成者**] は、決して物理学など自然科学の人間生活の中で果たす役割を軽視

しているのではない。ここで強調したいことは、人間の意識的行動や反省による行動または道德感覚に基づく行動などを考察する場合には、主として諸個人の心が再現する現象（心的秩序）を扱わねばならないのであって、外界に観察される物理的現象（物理的秩序）のみを直接扱えばよいのではない、ということなのである。

ハイエク曰く、

他人にも二つの事物（A1、A2）が（自分と）同じに見えると期待するのは、それらが他の事物（B、C、D……）に関して同じように運動すること（＝物理的關係）に気付いたからからではなくて、**我々（の感覚・心）にとってそれらが同じに見えるから**なのである。我々は、人びとがあらゆる客観的なテストに照らして異なる（＝物理的に異なる）外部刺激に（心が）同じく反応するだろうことを知っており、またおそらく、物理的には同じ刺激が、異なる環境で、異なる点で身体に働けば、まったく異なる仕方で（心が）反応するだろうことも知っている。言い換えれば、（人間の）意識的な決定において外部刺激を分類するのは、**この種の（心的な）分類を自ら主観的に経験することによってしかわからない方法による**ことを我々は知っている。我々は自分がするように、他人もさまざまな事物を同じないし異なるとみなすことを当然と考えているが、客観的なテストも、こうした事物と外部世界の他の部分との関係についての知識もこれを**正当化しない**。我々の手続きは、他者も概して「いつもではなく、たとえば色盲だとか狂人でないならば」**自分と同様にその感覚印象を（心で）分類しているという経験にもとづく**のである。

（出典：『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、26 頁）

◇◇◇◇◇

※ 以下、『著書』からの引用文については次のルールで記述することとする。

引用文は「 」内に記述し「 」の代替とする。また、 内は著者、（ ）内は論文筆者

(=私【ブログ作成者】)の付した補足である。

さらに引用文中に付した[マーカー(色各種)]、ゴシック文字、太(色)文字、傍点はすべて読者の理解を容易にする目的で、論文筆者(=私【ブログ作成者】)が付したものである。

引用文の出典については著者、『著書名』、頁等を引用文の末尾に記した。

◇◇◇◇◇

ハイエクの上記の論点のうち最も重要な事実は、外界のさまざまな事物の物理的関係(物理的秩序)の次元と、それらが物理的な刺激として身体に作用し、感覚器官と神経系を伝達する信号(インパルス)を通じて心に再現される心的秩序の次元との間には1対1の対応が存在しないということである。

すなわちどれだけ人類が自然科学を発展させたとしても---当然、そうした努力は、人間行動の便益・利便の向上や人間生活の福祉の向上にとって有益であり、極めて重要なことは事実なのだが---自然科学が外的世界の事物の物理的諸関係の解明をどれほど発展させても、その努力の結果に相応して、人間の心的秩序も解明されて究極的には人間精神が完成する---心的秩序がすべて物理的秩序で置き換えられて、人間の心がすべてを物理言語で理解できるようになる---などということには決してならないことを事実が示しているということである。

ハイエクはオーギュスト・コントの実証主義(実証的政治学---人類の文明の進歩(人間精神の完成)を必然的に支配する隠された自然科学の法則が存在し、それを発見することによって、人間の手の届く最善の政治体制(政治社会)を手に入れることができるという“コントの”思想の誤謬---を指摘し強く批判している。

以下、少し長いが一節を少し長いが引用する。

ハイエク曰く、

コントは・・・(社会の)再組織にあたって大きな障害である良心の自由のドグマに対する自らの憎悪をなお一層募らせている。

天文学、物理学、化学、そして生理学において良

心の自由のようなものがないのと全く同じように、ひとたび政治学が自然科学の地位にまで高められ、真実かつ究極の教義が明確に打ち立てられてしまえば、この手の一過性の事実は消えてなくなるであろう。・・・政治学はいまや三段階の法則に従って実証科学たらんとしているのである。その法則はいまや最終的な形でこう宣言される。「知識の各分野は異なる三つの理論的状态を経験することを必然的に余儀なくされている。ようするに神学的・創作的状態、形而上学的・抽象的状态、最後に科学的・実証的状态である。」最後のものはありとあらゆる知識の決定的な状態である(とコントは言っている)。

(コントの)社会物理学の目的は、万有引力の法則と同じく必然的な、文明の進歩の自然かつ不可避的な法則を発見することである。文明(という用語)によってコントが意味するのは、「人間精神の発展とその成果、人間が自然を支配する力の高まり」そして自然に従って行動し、自身の利益にかなうようにそれを変形することを習得する方法である。この意味での文明つまり科学、芸術、産業の状態こそが、社会組織の変遷を決定づけ規制するのである。社会物理学はあらゆる科学と同様に予見を目的とし、過去の観察を通じて文明の進歩が今現在実現しそうな社会体制を見極めるのを可能にする。実証的政治学の優位な点は、これら自然科学の法則によって必然となるものを発見するが、他の体系はそれを発明するのだという事実にある。我々に残されるのはただ、文明の進行が結果的に生み出す実証的体制の誕生を助けることである。そして、文明の現状と最も調和的な体制を見いだせば、我々は間違いなく現時点で手の届く最善の体制を手に入れるのである(とコントは述べている)。

歴史哲学についてのコントの見解は一般に「唯物論的」解釈の正反対とみなされているが、それがどれほど唯物論的見解に近づいているかに気付くであろう。とりわけ彼が文明という言葉に与える(文明の進歩は自然かつ不可避的な自然科学の法則に

支配されるという) 正確な意味を想起するならばである。

(出典:『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、154-155 頁)

続けて、ハイエク曰く、

彼(=コント)の関心はあらゆる現象についての擬人論的解釈からの持続的かつ漸進的解放であり、各科学は実証的段階に達してはじめてそれを完全に成し遂げるのである。形而上学的(哲学的)段階はただか神学的段階の解体の段階にすぎない。つまり、あらゆる現象に精神や神性を求めるもっと人格論的な見方をすでに完全に放棄してはいるものの、単にそれを、科学についての真に実証主義的な見方においては居場所のない、抽象的な実体ないし本質に置き換えただけの特異な段階にすぎない。実証的段階においては、現象を原因によって説明しようとする(心的過程の)一切の試み、あるいは「生産様式」についての言明は捨て去られる。それは観察現象を共在と継起についての規則によって直接結び付けること、いまだコントの使っていない現代の言葉を用いれば、それらの相互関係を**一般的かつ不変の法則によって単に「記述する」**ことを目的とする。言い換えれば、人が自身の行動のごときを解釈する際に獲得した思考習慣は永いあいだ外的自然の研究を**遅延させ**、その研究はこうした人間的習慣を**廃する**のに応じて初めて本当に**進歩した**のだから、人間の研究における進歩への道も同じであるに違いない。すなわち、我々は**人間を擬人論的に**(=心的過程を有する存在であると)**考えることをやめるべき**であり、**人間についても、外的自然について知っていることしか知らないかのように扱うべき**なのだ。コントはこれほどの語数を費やしてそう言っているわけではないが、それを言っているのになりに近づいている。だから、一体どうして、(実証主義を唱える)彼(=コント)には**この結論の逆説的な性格**が分からないなどということがあり得たのか、(私は)不思議に思わざるを得ない。

(出典:『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、198 頁)

1-2 人間の心的秩序の位相同型性について

話しを人間の心の構造(心的秩序)に戻す。

我々人間が他者の行動や外的世界の現象(事物)を理解できるのは自分自身が他者と類似の心の構造(枠組み)を持っており、それによって外的事物を同じ用途や同じ効果を期待できるものとして分類する---このようにして心は事物に“質”や“価値”を与える!---からなのである。人間の心とは、外的世界の客観的(物理的)関係の像を映し出すだけの反射鏡ではないのである。

すべての人間が持つこの共通の心的構造が人間相互のコミュニケーションや理解を可能にするのであるが、それでも諸個人が持ち得る知識や信念は断片的で不完全であるのは避け難いので、人間相互のあいだには、今なお多くの点で意見の相異や対立が多く生じることもまた、我々人間の認めなければならない事実であろう。

このように我々がよく知っている事実を踏まえるなら、異なる諸個人の心は(外界の像を映す反射鏡のように)「同一」ではないが、外的な物理的刺激を同じ仕方で分類する、共通の心的秩序(構造)を持っていることが解るであろう。心理学ではこれを「人間の心的秩序は位相同型である」(なお、位相同型の定義はハイエク全集『感覚秩序』の定義による。)と言う。

もし人間の心の構造(心的)秩序にこの位相同型性がなかったならば、我々は他者の行動が意図すること(意味)を理解することもできないし多くの人間が似かよった環境において似かよった行動をすることもあり得なかったであろう。すなわち人間が社会を形成することなど万が一にもできなかったはずである。

ハイエク曰く、

もしも、さまざまな人びとの知識や信念がすべて**同一**であると想定し得るならば、また我々が(すべ

ての人びとの一つの全体としての) 単一の心に関心を寄せているならば、それを「客観的」事実と呼ぼうと主観的現象と呼ぼうと問題ではない(=意味がない)。しかし、あるグループの人たちの行動を導く具体的な知識は、首尾一貫した纏まり(一つの全体)としてはけっして存在しない。それは断片的で、不完全で、一貫性を欠いた形でしか存在せず、多くの個人の心の中に現れる。あらゆる(個人の心の中の)知識が断片的で不完全であることは、社会科学が始点とすべき基本的事実の二つである。哲学者や論理学者が「単なる」人現精神の不完全性として輕蔑的に片付けがちのものが、社会科学では死活的に重要な基本的事実なのである。・・・それとは反対の「絶対主義的」見解・・・は、知識が、とりわけ特定環境についての具体的な知識が、あたかも「客観的に」与えられているかのように、つまり万人にとって同一であるかのようにみる見解である。(出典：『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、30頁)

1-3 ヒュームの反合理主義的道德論

さて私 [= ブログ作成者] は、外界の物理的秩序と人間の心的秩序の関係についての一つの重要な課題、すなわち人間の道德規則や道德的価値に関する課題について考察してみたいと思う。

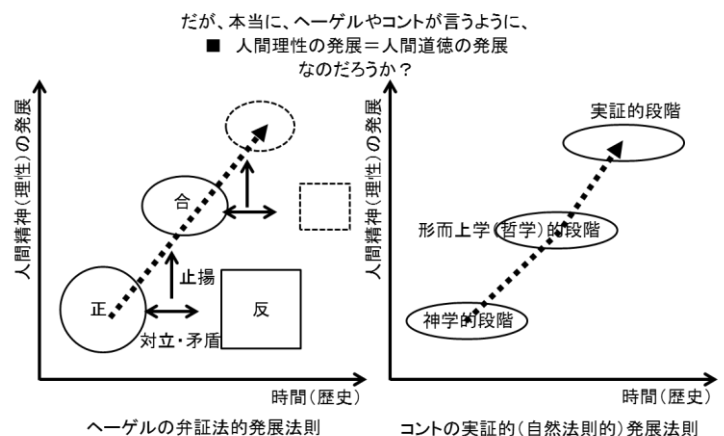
その課題とは、人間の道德規則や道德的価値は「特定の時代の時代環境によって正当化されるもの」言い換えれば「特定の時代の人間理性の発展の程度に応じて、その時代に合理的に論証される道德規則だけが有効とみなされる(=道德的相对主義)」という見解が真なのか、それとも「道德規則は、古来より人間精神に不易なものである」という見解が真なのかという問いである。

但し、私 [= ブログ作成者] はこの問題の考察において、両見解のいずれの場合でも、人間の心的秩序には「道德感覚と理性の両方が(現実として)存在していること」を前提とするのであって、つまり道德感覚と理性の存在の関係を考察するのであって、社会を形成している人間の心に、それらの一方

でも存在しないとか、必要でないと主張するような誤謬は端から棄却している。

さて、前者の道德的相对主義の考えうる思想的根拠は、ヘーゲルの理性の弁証法的発展法則やコントの実証主義的(自然科学的)な理性の発展法則の帰結として、人間の歴史は(彼らの考えた!) 理性の発展法則に従うのを必然とされ、歴史は決定され法則に従い、特定の経路を歩まねばならず、人間の理性も歴史の進行とともに必然的に発展するというものである。

そして、ヘーゲルやコントラは、人間の道德規則は「理性によって合理的に論証されるものしか認めない!」のであり、その結果、特定の時代(例えば日本国の江戸時代など)の道德規則と他のあらゆる時代(例えば現代の日本国)の道德規則とを比較すれば、理性発展の程度に応じて相対的となり、かつ後の時代の人間ほど、理性の発展法則の必然として、道德的人間であるはずであるという非現実(非歴史)的な奇妙な結論に導かれるのであるが、これは事実には即さない明白な誤謬である。



【図説】人間精神(理性)の発展と完成の法則

私 [= ブログ作成者] には、ヘーゲルやコントの主知主義(合理主義)的思想から導かれる結論の上記の誤謬は、ヒュームの反合理主義的道德論の「道德のいろいろな規則は理性の結論ではない」、「道德的区別は理性の産物ではない」、「道德が理性の演繹によってのみ発見されると称することは、無駄である」などの道德原理が解答を与えているように思わ

れるので以下に引用しておく。

ヒューム曰く、

道徳は行動や情念に影響を及ぼす。して見れば、**道徳は理性から来ることができない道理**になる。なぜなら、〔『人性論』第2篇第3部第3節で〕証明したとおり、理性のみではかような〔行動や情念への〕影響力を些かなりと断じてもつことができないからである。道徳は情緒を喚起し、行動を産んだり防止したりする。然るに、**理性自身はこの点において全く無能**である。それゆえ、**道徳のいろいろな規則は理性の結論ではない**。

・・・理性が情緒や行動に少しも影響を及ぼさない点を容認するかぎり、**道徳が理性の演繹によってのみ発見されると称することは、無駄**である。およそ**能動的原理**は**非能動的原理**を根底とすることが決してできない。

従って、理性がそれ自身では非能動的であるとすれば、理性はそのあらゆる形態・現象態において同じ〔**く非能動的な**〕ままで留まらなければならない。すなわち理性は、自然に関する主題に就いて発動するにせよ、精神〔ないし道徳〕に関する主題に就いて発動するにせよ、外物の力能を考察するにせよ、**理性的存在者の行動を考察するにせよ**、同じ〔**く非能動的な**〕ままで留まらなければならない。

・・・**理性とは真偽の発見である**。ところで**真偽は、観念間に真に存する関係との一致・不一致か、真の存在ないし事実との一致・不一致か、そのいずれかに存する**。それゆえ、かような一致・不一致を許さないものはすべて真もしくは偽であることは決してできない。ところで明らかに、我々の情緒や意欲や行動はかような一致・不一致を些かも許さない。なぜなら、それらは根源的事実ないし實在事であり、それ自身に完成しており、他の情緒や意欲や行動との何らの関連も内含していないからである。それゆえ情緒や意欲や行動は真偽のいずれとも宣言されることができなく、従って、理性に反対であることもこれに適合することもできないのである。

この証明は現在の目的にとって二重の利益がある。なぜなら、この証明は〔第一に〕行動の〔道徳的〕値打（価値）が理性との適合から得られもしないし又その誹謗される所以が理性との反対から得られもしないことを、端的に証明する。

また〔第二に〕この証明の明示するところによれば、**理性は行動に異議を唱え又はこれを是認し・・・行動を直接に防止又は産出することが如何にしても出来なく、従がって道徳的善悪の、すなわち、該影響力〔言い換えれば行動を防止し又は産出する力〕を有すると見出される道徳的善悪の、源泉であることができない**のであるが、上記の証明はこの点を明示することによって、〔行動の道徳的値打が理性との適合又は反対から得られないという〕同じ真理を更に間接に証明するのである。およそ行動は褒賞され又は誹謗されることができよう。が、理性に合ったり合わなかったりすることはできない。それゆえ、褒賞されたり誹謗されたりできることは、理性に合うことができ又はできないことではない。行動が〔道徳的に〕値打あるか値打ないかは、我々の自然の向癖としばしば矛盾するし、また時には前者が後者を制御することもある。が、理性はこうした影響力を少しももたない。それゆえ、**道徳的区別は理性の産物でない**。**理性は〔もともと〕全く非能動的である**。**従って、良心ないし道徳感のような能動的原理の源泉であることは決してできない**のである。（出典：ヒューム『人性論（四）「第三篇 道徳について」』、岩波書店、14～16頁）

さて、ヒュームの理論が正しいならば（反駁されない限り）、前者の道徳的相対主義の根拠は否定されたことになる。だから、「理性の発展法則」以外に、道徳的相対主義を支持する有力な理論的根拠（哲学）が示されない限り、後者の“不易の道徳原理（絶対価値）”の正しさの証明は必要あるまい。

1-4 人間行動のミステリー（不思議）について

私〔＝ブログ作成者〕は「人間の心とは、外的世界の客観的（物理的）な関係の像を映し出すだけの

反射鏡ではない」と述べたが、ここではこの意味をもう少し詳しく考察してみたい。

我々人間が外界で起こる物理的または人間的な現象を見聞し、心で知覚・判断し、行動（反応）する場合、我々の心は外界の現象（あるいは現象を構成する様々な要素）を、その物理的特性や物理的関係性のみによって分類するのではなく、むしろそれらが、我々人間の特定の目的にとって、同じことを意味したり、同じ用途に役立ったり、同じ効果をもつと期待したりできる事物（群）として分類しているのである。

このことは我々人間という存在に関する次の重要な意義を再発見させてくれる。

すなわち、人間の心（心的秩序）は外界の物的（客観的）事物（とその関係）に主観的な質と意味を与えて分類し、その質と意味の分類を人間相互の間で共有する―教え、学び、記憶し、比較し、自省・フィードバックする―存在なのである。このことは自明の事のように考えられているが、実は多くの人びとが自明と言うほどには、その意味を深く理解してはいないことに後に気付くであろう。

それはさておき、多くの人びとには自明であるにも関わらず、我々人間の心的秩序によって分類し認識する外的世界が心的作用の不規則性に満ちた世界像（不純物の多い偽の像）である故に、「真の世界」ではないと唱え、「真の世界」の認識は、人間の心的秩序を外界の物理的秩序（客観）に置き換えることでのみ可能であると主張する思想がある。

しかし、実際にはこの思想は物理的秩序と心的秩序が位相同型でないことから不可能であろう。

ハイエクの『科学による反革命』の次の一節を、人間の心が事物や行動に付与する意味付け（心的秩序による分類の過程）を全く知らない（理解できない）宇宙人が、初めて地球へやって来て、地球の外から望遠鏡で人間社会の動きを眺めて観察している情景を思い浮かべながら読んでみると非常に面白い（普段は、多くの人びとが当然と考えている、心的秩序の位相同型性の重要性がよく解る）のでは

ないだろうか。

ハイエク曰く、

（社会研究の）科学主義的アプローチがもくろむこの人間の出来事についての距離を置いた包括的展望は、今ではしばしば「マクロ的展望」と呼ばれている。それはおそらく、望遠鏡的展望〔単純に距離を置いた見方を意味する―それが反転望遠鏡を通じた見方というのでなければ〕と呼んだ方がよいであろう。なぜなら、そのねらいは（集団の）内側からしか見ることのできないもの（＝個々人の行動や相互作用の意味することなど）を意図的に無視することだからである。このアプローチが見ようとする「大宇宙」では、そしてそれが生み出そうとしている「マクロ動学的」理論においては、要素は個々の人間ではなく集合（集団）、つまり不変の組織形態であり、それは厳密に客観的な言葉で定義・記述できると考えられている。

しかし、ほとんどの事例において、総体的展望は客観的基準によってあれこれの全体を区別することを可能にするという信念は、単なる幻想であると分かるのである。

このことは、もしも本当に、行動する人びとについての事物の意味に関する知識を（観察者から）排そうとし、もっぱらアリ塚やハチの巣を観察するのと同じように人間の行動を（意味付けなしで）観察するとしたら、大宇宙は一体何から成立しているのか（＝アリとハチと人間あるいはサル等の区別ができるか？何がひとまとまりの単位なのか？などと考えて見よ！）を真面目に想像しようとしてみれば・・・その・・・描像の中には、手段や道具、商品や貨幣、犯罪や処罰、言葉や文章のようなものは登場しえない（＝思考不能）であろう。その描像は、観察者（のみ）にもたらされる（何らかの）感覚属性によって定義されるか・・・ただ純粋に関係的に定義される物理的対象（やその運動の軌跡）しか含みえない。そして、大多数の事例において、人は観察者には同一と思われるもの（対象・事象）に対して同じように反応するようにも見えず、違って見え

るものに違って反応するようにも見えないであろうから、物理的対象に対する人間の行動は、その種の観察者にとって**識別可能な規則性をほとんど何も示さない**であろう。そのため観察者は、まずはじめに（観察者の心と思考形式に）**人間の感覚と心が外部世界を映し出す仕方をすべて詳細に再構成することに成功**していなければ、その行動の説明の成就を期待しえないであろう。

言いかえれば、火星からきた高名な観察者は、**普通の人間がしているのとせめて同じ程度に人間の問題を理解しようとするならまず、我々にとって人間の行動に関する一切の解釈の出発点をなす心の直接的なデータを、我々の行動から再構成しなければならぬ**であろう。（出典：『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、62-63頁）

2 心の位相同型性が生み出す、社会の自生的秩序

2-1 社会の諸制度と形成物の生成について

人間の心的秩序に位相同型性がある（同一ではないが、同じ仕方で事象を分類する）ことは、人間相互が他者の意図や行動の意味を理解できる基礎となっている。このことは、同時代の人間相互の間だけではなく、古来の祖先から現存する我々に至り、後世の子々孫々にわたって不変であり続けるものと思われる。

人間は心的秩序を基礎に持っているからこそ、自国の（あるいは他国のでさえ、）歴史とその社会的諸制度（形成物）の構造（構成）、例えば国家の統治機構・防衛機構・司法制度、家族その他の種々の形態の中間組織、伝統・法・法律、慣習、道德、宗教、言語（文学）、諸科学、学問・芸術、所有（財産）・交換・交易・貨幣・信用・企業・職業（労働）などの経済諸制度・・・等々を理解することができるのである。

なお、これらの個別的・具体的な内容やあり方について肯定（賛成）したり否定（反対）したりできるのも、これらを理解できるからであろう。

私 [= ブログ作成者] がここで読者に主張したい

ことは、歴史家や社会学者（あるいは一般の評論家ら）が議論の場で安易にあるいは不用意に使用する上記の社会的構造や形成物（例えば、政府、交易、軍隊、階級、知識・・・など）に関する「全体（集合体・集団）」概念の怪しく、いかがわしい定義に騙されぬよう十分に注意せねばならない（安易に固定観念にとらわれてはいけない!）ということなのである。

次にハイエクの説明を引用するが、少し難解かもしれない。

ハイエクの論旨を先に**私 [= ブログ作成者]** なりに大雑把に要約すれば次のとおりであるので理解に役立てて頂きたい。

多くの歴史家や社会学者が自然的単位（あるいは個体）のように「全体（集合体・集団）」を図式化して取り扱うが、それは観察できる結果についての通俗的な観念にすぎず、実際には、ある種の“全体（構造・構成）”とは、歴史上の特定の時点において、“さまざまな人々が相互に入れ替わっているにも関わらず、人びとの間に恒常的な関係（構造）が維持されている場合”に、諸個人の（位相同型な）心的秩序に基づく一定の見解と行動から、相互の恒常的な関係（構造）を再構成する---すなわち要素から全体を構成する---理論としてのみ記述できるものなのである。もっと簡潔に言えば、諸個人の主観的意見と行動とそこから全体を構成する説明理論が全体（集合体・集団）に先立つのであって、全体が諸要素に先立つのではない（諸要素からの再構成の理論を知らずして、全体の観念は得られない）ということである。

ハイエク曰く、

何が思考の一対象を構成しうるのかについての**通俗的な曖昧さ**---とりわけある特定の状況の総体〔すなわちすべての可能な側面〕がかりそめにも**思考の単一の対象**たりうるという**誤解**---に由来している。・・・所与の時間的・空間的限界内に発見できる同一の**複合的現象**は・・・**多くの異なる側面から考察することが可能**である。我々が（複合的現象

である)出来事を(心で個々の現象に)分類ないしひと纏めにするときの(心的な)諸原理(=心的秩序)は、単に一点のみならず、さまざまな点でそれぞれ異なっているかもしれない。(さらに、個々の現象を理論づける)種々の理論科学は、現象の複数の側面のうち、・・・適合しうるもの(現象)しか取り扱わない。・・・(社会科学であれ自然科学であれ)知識にかかわるいずれの学問も、理論的であれ歴史的であれ、現実世界の選択された側面しか扱えないのである。・・・出来事から生じる特定の問題に答える・・・場合には、その特定の問題に関連する特徴を選択しなければならないであろう。だが重要な点は、所与の時と場所に見出しうる無限に多様な現象から限られた数のものを・・・選択しなければならないということである。そうした場合、我々はときに、科学者(あるいは歴史家)があたかもその見たとおりの「全体」状況を考えているかのよう

に語るかもしれない。しかしそれが意味するのは、一定の時空的限界内に観察しうる一切切の尽くしがたい全体のことではなくて、問われた問題に関連すると思われる一定の特徴のことなのである。・・・歴史家の研究する全体の本質・・・それは、決して全体としては与えられず、つねに歴史家によって、それだけが直接的に知覚できる諸要素から再構成されるのである。実在した政府、進行中だった交易、移動した軍隊、保存されたり流布された知識など、何について語るにせよ、彼は決して、直接的に観察できる物理的属性の不変の集合に言及しているのではなく、つねに、ただ推測できるにすぎない、観察される要素の一部の間の関係の体系に言及しているのである。政府、交易、軍隊、知識のような言葉は単一の観察可能な事物(個体)をあらわすのではなく、関係の構造をあらわしているのである。それは、つねに変化している要素間の関係の恒常的体系についての図式的表現ないし「理論」によってしか記述できない。言い換えれば、これらの全体はそれを構成する理論を離れては、つまり観察される要素間のつながりを再構成し、この特定の組み

合わせの含意追究できる心的技術を離れては存在しないのである。それゆえ、歴史的知識における理論の位置(役割)は、歴史が言及するさまざまな全体を形成ないし構成することにある。つまり全体に先立つのである。全体は部分を結びつける関係の体系を精査することによってしか見えてこないのである。(出典:『ハイエク全集Ⅱ-3「科学による反革命」』、春秋社、74-75頁)

さらにハイエクが導いてくれる次の結論は、極めて重要であるので、続けて引用しておきたい。

単に直感的に把握されたにすぎない全体についての曖昧な構想を、あたかも客観的な事実であるかのごとく論じ・・・最終的に、それは直接把握できる唯一のものであり、そこから全体を再構成しなくてはならぬ諸要素が、まったく逆に全体からしか理解できず、全体を知らなければその要素は理解できないという見解をもたらしたのである。

人間の歴史は無数の(諸個人の)精神の相互作用の結果であるが、なお精神の手の届く単純な法則に従っているにちがいないという信念は今では広く抱かれているから、それが実際にどれほど驚嘆すべき主張を含んでいるかをかりにも自覚している人は稀である。直接的に知りうる要素から複雑かつユニーク(個別的)な構造を再構築する、そして要素間の関係の変化から全体の変化へと道をたどるといふ地道な仕事を辛抱強くやるのではなく、こうした歴史の擬似理論の著者達は、ある種の心的ショートカットによって、直接的に把握された全体の連鎖の法則の直接的な洞察に到ることができるとうそぶくのである。その身分がどれほどいかにわしかろうと、これらの発展理論は、本来の体系的研究の結果のいずれよりもはるかに大きく公共の創造力を支配してきた。実際、歴史の「哲学」ないし「理論」[あるいは「歴史理論」]は19世紀の特徴的な性質、すなわち「いとおしき悪徳」になってしまった。ヘーゲルとコント、とりわけマルクスから下ってゾンバルト、シュペングラーにいたるまで、これらの偽

理論は社会科学の代表的な成果とみられるようになった。そして、歴史の必然の問題として、ある特定の「システム」は新しく異なるシステムによって置き換えられなくてはならないという信念を通して、そうした偽理論は社会的進化に対して甚大な影響を及ぼしてきた。これが現実となったのは、主として偽理論が自然科学の与える類いの法則のように見えたからである。そして、自然科学がすべての知的努力を測る基準を与えていた時代においては、将来の発展を予測できるというこれら歴史理論の主張は、それが優れて科学的な性質を持つことの証拠とみなされたのである。この種の 19 世紀に特徴的な多くの成果の単に一つにすぎないけれども、マルクス主義は、こうした科学主義の成果が広範な影響力を獲得することについて他のいずれよりも格好の媒体になったのであり、マルクス主義の敵たちの多くもその支持者と同じくその言葉で考えるに至ったのである。

しかし、新たな理想を打ち建てたことは別として、この展開はまた、過去における社会的現象の理解の基準であった既存の理論の信用を失わせるという否定的結果をともなった。直接に社会や、あるいは変化したいずれかの社会的現象の全体的な変化を観察できる、そして、全体の中にある一切合切が全体と共に必然的に変化するにちがいないとされていたので、これら全体を作り上げている諸要素については（例えば、諸個人は主観的に行動するので、すべて個別的であるから）如何なる超時間的一般化もあり得ない（すなわち、心的秩序の位相同型性からは一般化を構成し得ない）、すなわち諸要素（諸個人の行動）を全体へと組あげうる（構成しうる）方法についてはどんな普遍的理論もあり得ないと（誤って）結論付けられた。言われるところによれば、すべての社会理論は必然的に歴史的で時間に拘束され、特定の歴史的段階やシステムにしかあてはまらない（諸個人の心的秩序に基づく行動からは不易な一般性や一般規則は生じえない、と誤解された）のであった。

・・・（これらの「社会理論」に関する誤謬は、次の事実を考えれば解るが、）誰かが自分にも我々にも理解不能な（観察者と心的秩序の全く異なる）別の種族の行動を観察し記録することを考えてみると、その記録はある意味では歴史であるだろう。例えばアリ塚の歴史のように。その種の歴史は純粹に客観的な、物理的な言葉書かなければならないだろう。それは実証主義者の理想と一致する類いの歴史であろう。おそらく、別の惑星からきた高名な観察者が人類について（人類の心的秩序や行動の仕方を全く知らずに）書き記すようなものである。しかし、その種の歴史は、そこに記録された出来事（例えば、制度や形成物や集合のように見える事物の「全体」）のどれ一つについても、我々（人間）が人間の歴史を理解するという意味で理解するのには役立たないであろう。（出典：『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、78 頁、79 頁、84 頁）

2-2 あらゆる人間性の抹殺を目論む邪教——共産主義

例えば、マルクス／エンゲルスは、著書『共産党宣言』の中で次のように述べているが、ここまで本小論に付き合っ頂いた読者諸氏は、彼らの理論が抽象的な集団概念ばかり（しかし、それとて実は、マルクスとエンゲルスが考察した限りでの集団概念にすぎないのだが。）から創作されており、それが如何に陳腐で愚昧な理論にすぎないもの---創作の苦勞・苦心は理解できるとしても---であるかを一目瞭然に理解することだろう。

マルクス／エンゲルスは言った。

これまですべての社会の歴史は、階級闘争の歴史である。自由人と奴隷、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルド仲間と職人、ようするに抑圧者と被抑圧者とは、相互にたえず対立していて、ときにはひそかに、ときには公然と、絶え間なく闘争をおこなってきた。

・・・プロレタリアは、無所有である。妻子に対

する彼の関係は、もはや、ブルジョワ的家族関係と共通のものを、何も持たない。近代的工業労働、資本のもとでの近代的従属は、フランスでもイギリスと、ドイツでもアメリカと同一であって、彼からすべての国民的性格を剥ぎ取った。法律、道徳、宗教は、彼にとっては、それだけの数のブルジョワ的偏見であり、その背後に、それだけの数のブルジョワ的利益を隠しているのである。・・・プロレタリアは、彼らに固有のこれまでの取得様式を、それとともにこれまでの取得様式全体を、廃止することによってのみ、社会的生産諸力を征服することができる。プロレタリアは、彼らのものの中に、確保すべき何ものも持たない。彼らは、これまでのすべての私的安全保障と私的保険とを破壊しなければならない。・・・こうして我々は、それが暴発公然たる革命となり、プロレタリアートが強力によってブルジョワジーを転覆し、自己の支配を打ち立てる、という点に到達したのである。

・・・共産主義者たちはさらに、祖国と国民性を廃止しようとしたと、非難されている。(しかし、)労働者は祖国を持たない。人は彼らから持たないものを取り上げることはできない。

・・・共産主義者に対して、宗教的、哲学的、イデオロギー的な観点一般からなされている非難は、詳しい検討には値しない。人間の生活諸関係、彼らの社会的諸関係、彼らの社会的存在とともに、彼らの思考、見解、概念もまた、一言で言えば彼らの意識もまた変化するということを理解するのに、深い洞察が必要であろうか。(出典：マルクス／エンゲルス『共産党宣言・共産主義の諸原理』、講談社学術文庫、11頁、27頁、28頁、42頁、43頁)

このようにマルクス／エンゲルスはすべての人間の心的秩序をすべて破壊・破棄することによって---そのためには、現存の人間道徳・社会制度・形成物などの構成を悉く破壊することによって---全く「新しい人間(共産主義者)」から構成される新しい理想社会すなわち「共産社会」を創造できると予言したのであるが、彼らの言う、古来の心的秩序を

捨て去った「新しい人間」像とは如何なるものか？と問えば、次のように、まったく抽象的で妄想的で空無で陳腐な代物でしかないのであった！

マルクス／エンゲルスは言った。

諸階級の存在は、分業から生じるのであり、分業はそのこれまでの様式においては、まったく消滅する。なぜなら・・・機械的及び化学的な補助手段・・・を運動させる人間の諸能力もまた、それに対応する程度に発展していなければならないからである。・・・社会全体による生産の共同経営とその結果として起る生産の新しい発展は、まったく別の人間を要求し、また生み出すであろう。・・・今日の人間のような人間によっては、生産の共同経営は起りえない・・・社会によって、共同的かつ計画的に経営される工業は、諸要素があらゆる方向へ発展した、生産の全体系を見渡せる状態にある人間を、完全に前提する。・・・教育は若い人びとに、生産の全体系を急速に修了させることができるだろう。それは彼らを、社会の必要あるいは彼ら自身の性向が求めるに応じて、ひとつの生産部門から他の生産部門へ次々に移行するような、立場におくであろう。こうしてそれは彼らから、現在の分業が各個人に押し付けている、一面的な性格を取り去るであろう。こういうやり方で、共産主義的に組織された社会はその構成員に、彼らのあらゆる方面へ発展した素質を、あらゆる方面で活動させる機会を与えるであろう。そしてそれとともに、必然的に、さまざまな階級もまた消え失せる。・・・生産諸力の共同的で計画的な利用のための、社会の構成員の一般的な連合、すべての人の欲望を満足させる程度の、生産の拡大、ひとりの欲望が他人の犠牲において満足させられる状態の終了、諸階級とその対立の完全な絶滅、社会のすべての構成員の諸能力を、これまでの分業の除去によって、仕事の交替によって、すべての人によって生み出された快樂へのすべての人の参加によって、都市と農村の融合によって、すべての方面へ発展させること---これが、私的所有の廃止の、主要な結果である。

2-3 合「目的」的な自生的秩序について

人間社会には、国家、言語、法、家族、宗教、貨幣、市場・・・のような人間の意図的な設計の結果ではないが、人間社会の秩序維持にとって絶対不可欠である制度や形成物が、現実存在している。これは誰も疑う余地のない事実であろう。

ところが、歴史主義者（歴史哲学派）、実証主義者、マルクス主義および共産主義らには、これが全く理解できない。彼らによれば、人間の（というより彼ら自身の）意図的な設計（＝目的）の結果として目的のとおり達成されたものだけが、合目的的（＝有益）な制度なのであるが、現実的にも理論的にも誤謬であり、破綻している。

彼らの思想では、その創設を意図する人々の共同意志（合意、契約、実定的立法など）の（目的通りの）結果として達成された制度のみが、合目的的（＝有益）とみなされるのである。

さて、我々が一般的に使用している「目的」という言葉の概念とは、ある結果を意図的に目指して行動する個人を想定すれば、「目的」は個人が自由に選択できるものであり、彼の自由な行動（手段の行使）の結果が、目的と合致した時に彼の目的は達成され有益であったと感ずるのである。

だが、彼はなぜ自分の「目的」を“自由”に選択でき、そのための“自由”な行動ができたのかも考えなければならないだろう。ここに「目的」という言葉の持つ、もう一つの重要な意味が明らかとなる。

諸個人の自由は、彼らの心的・物的相互関係の網の恒常的構造---この関係網・構造が、社会的制度や社会的形成物の本質であるのだが---が維持され、機能しているから保障されているのであり、諸個人はその見ざるネットワークの焦点として存在していればこそ、その“生命／安全・財産・自由”が保障されているのである。この関係網・構造の簡単なイメージについては、本論【附録】 位相同型性（イソモルフィズム）について の図を参考にして頂きたい。

このため、人間の自由は決して放縦とはならず、

関係網（構造）の制限下にある自由となるのである。

また、先に述べたように、人間の社会とは諸要素から構成される理論（関係性の説明）としてのみ記述できるものであり、自然的単位（あるいは個体）として観察できるものではないから生物学的有機体（個体）との類比による説明には、慎重であらねばならないが、それでも次の事実は類比できると思われる。

すなわち、生物学的有機体（個体）の諸部分は、それら自身を纏め上げて全体を構成しているメカニズム（構造）の本質を理解（意識）して機能しているわけではないが、自己の機能を果たすことで、全体（諸関係の恒常的構造）を維持しているのである。

すなわち、諸部分は無意識的に自己の機能を果たしているのであるが、その結果として諸部分は、全体（個体）の恒常的構造の維持に貢献しているがゆえに《合目的的》と言えるのである。

これが先に述べた「目的」という言葉の概念の持つ、もう一つの重要な意味なのである。

同様のことが、諸個人と社会的制度・社会的形成物の関係網との間についても言えることは自明であろう（しかも、諸個人は自由でありながら！）。

つまり人間はそれぞれの個人的「目的」を追求する自由の権利を持ちながら同時にその自由の条件を構成する社会秩序（関係網）を維持するための《合目的的》な義務を果たすべく、“見えざる構成（関係網）”によって導かれ、保護されているのである。

ハイエク曰く、

社会的領域では、諸部分の一定の構造的結びつきを維持するこれらの自生的な動きは、特殊な仕方では我々の個々の目的と結びついている。すなわち、こうして維持されている社会的全体は、個人として我々が目指す多くのものを実現するための条件、つまりそもそも個人的欲求の大半を抱くことを可能にし、それを達成する能力を与える環境なのである。

・・・紛う方なく人間行動の結果なのであるが、

なお設計されたのではない、つまりこれらの行動の意図した結果ではないかもしれない、制度という言葉自体が、意図的に制定されたものを示唆するがゆえに、この点でむしろ誤解を招くのである。おそらくこの言葉は、特別な目的のためにつくられた特定の法律や組織のような特定の仕組みに限定された方が、また貨幣や言語のようにかく創られたのではない現象については形成物 (formation) [地質学者がこの語を使うのと似た意味で、またドイツ語の Gebilde に対応する] のようなもっと中立的な言葉を使った方がよいであろう。

・・・人間の文明をすべて意識的理性の産物ないし人間の設計の産物と見るならば、あるいは、自分の行為が知らぬ間に築き上げたものを意図的に再創造したり維持したりすることが必ずや可能であると想定するならば、我々は分不相応に自惚れている。文明は個々の知識が累積した結果であるが、社会の中の人間が、自分も他の誰も完全には所有していない一連の知識からつねづね利益を得ることができるのは、これらすべての知識がいずれかの個人の頭脳の中に明示的・意識的に組み合わされることによるのではなく、我々が理解せずに用いているシンボル、つまり習慣や制度、道具や概念のうちにその知識が体现されることによるのである。

・・・集合主義的理論の生来の弱さについてもっと重要なのは、以下に見る巨大な逆説である。すなわち、社会はある意味で単なる全個人の総和以上であるとの主張から、その支持者たちは決まって知的宙返りを打って、このもっと大きな実体の統一性を防衛するためには、それを意識的な管理に、つまり究極的には個的精神であるはずのもの (集合主義を支持するする一個人の精神など) の管理に服従させなければならないというテーゼに行き着くのである。従って実際には、個的理性を褒めそやし社会のあらゆる諸力を単一の指導精神の指揮に従わせることを求めるのはいつも集合主義者であり、対して、個的理性の能力の限界をわきまえ、それゆえ自由を、個人間の過程の諸力の最高度の発展のための

手段として掲げるのは個人主義者である、という状況が生じるのである。(出典：『ハイエク全集Ⅱ - 3 「科学による反革命」』、春秋社、88～92 頁)

2-4 非・合理的な超・合理主義

どんな個的精神によっても、意識的に導かれたわけではないのに、諸個人の社会的諸関係における相互作用が、国家、言語、法、家族、宗教、貨幣、市場・・・のような社会秩序の維持に絶対不可欠な制度や形成物を産み出してきたことを事実と認めるならば、これらのある種の人物や集団の精神 (理性) の意識的な管理と指導により、必然的な発展へ導くことができると見做すのは、早計な思い上がりからくる、愚かな謬論と言えよう。

諸個人が、自らの精神 (理性) の本性上の限界を自覚し、それ故に社会を構成する関係網の中で行為し、人間相互が営む社会過程の様々な自生的結果 (秩序・構造) を利用することで、その中に存在 (蓄積) しているが、意識的には明確に自覚することのない知識 (智慧) の助けをかりてはじめて諸個人は自らの能力以上の能力を発揮することができるのである。

それにも関わらず、そのような無意識的な共働によって得られる諸個人の能力の可能性を認めず、諸個人を「一個の全体」とみなしてそれのある種の個的精神 (理性) の管理・指導に従わせる方が、前者の諸力によるより、優れて発展した社会に導けると主張する者は、無知ゆえの妄想家であるか、自分のみは他者の心的秩序と異なる超越精神を有する絶対的存在であるはずだと信じる新宗教の教祖でしかあるまい。

我々人間は社会の自生的な諸関係を理論的 (原理的) に理解しようと努める限りにおいて、それらを活用して諸制度や形成物を適度に、慎重に調整することにより、修正・改善を試みることは可能なだけである。

しかし傲慢な新宗教の教祖はいつの時代にも、複数現れて宗派を形成し、その中の誰が人間精神の管理者・指導者にふさわしいかを争い、他宗派の見解

を（あるいは宗派の存在そのものを）邪教の教義と見做して排斥しようとする。だがそもそも諸個人の相互関係の所産である自生的秩序をある種の個的精神（理性）が管理・指導できるという信念自体が非実在の妄想でしかないから、彼ら宗教家の妄想のどれもが「唯一絶対的」と決定づけられる論拠など存在せず、正当性の根拠は結局のところ、その信念（妄想）の担い手の属性や偶像、すなわち人種・民族・階級・人権・環境／特定動物・性別／性嗜好・精神医学／心理学・完全知識などに帰されるのである。左翼（極左）思想とは、何と非合理的な超合理主義なことであろうか！

このような思想を誤謬ゆえに不当！と見做して却下されるなら、一国の政府（統治機構）の意識的な指導（計画や統制）による各種政策の強制が、国民の自生的諸力に任せるよりも、優れてうまく達成されるにちがいないという政治家の信念（幻想）も同様に却下されねばならないのではあるまいか？

ハイエク曰く、

普遍的な意識的管理を求める要求を人間の精神の成長それ自体に適用する・・・大胆な思想は、外的自然の征服における理性の成功（＝自然科学の発展）がかつて導いた最も極端な帰結である。それは現代の思想に特徴的な性質となっており、一見全く異なり、そもそも正反対の思想体系と思われるものの中に姿を現している。L・T・ホブハウスは「集合的人間性」が自らの進歩において自己決定するという理想を人間活動の崇高な目的として、また行為の法を判断すべき最終の規準として」掲げるとし、ジョセフ・ニーダムは「意識が人間の問題に対して管理を強めれば強めるほど、人間はますます超一人間的になるであろう」と主張する。はたまたヘーゲルの徹底した支持者たちは＜理性＞が自己意識的となりその運命を管理するという鳥瞰図を素描し、カール・マンハイムは「人間の思考はかつてないほど自発的かつ絶対的になった。なぜなら、それらはいまや自らを決する可能性を知るからである」と考える。しかし、どの主張も基本的な態度は同一である。

これらの教義がヘーゲル的な見解から来るのか、それとも実証主義的な見解に発するのかに応じて、それを抱く人びとは、相互に自分たちは全く異なり、相手より上だと考えている、区分されるグループを形成している。しかし、人間の精神はいわば自分のブートストラップを掴んで自らを引き上げることができる、という共通の思想は、同一の一般的アプローチから生じている。それは、人間の＜理性＞を外部から一つの全体として研究することによって、我々はその運動の法則を、内部からの辛抱強い探究、つまり個的精神（諸個人の心的秩序）が相互作用する過程を実際に追ってみること（関係性の諸原理を発見し、構成・総合すること）によるよりも、もっと完全かつ包括的な仕方では把握することができるという信念にある。

したがってこのように、その成長を意識的に管理することによって人間精神の能力を高められると嘯くことは、この成長を完全に説明できると主張するのと同じ理論的な見解、すなわち、そう主張する人びとの側がある種の超精神を備えていることをほのめかす主張に基づいている。そしてこうした理論的な見解を抱く人びとが、同時にこのように（自分たちに）指導された精神の成長を見てみたいと思うのは偶然ではない。

・・・現代に特徴的なこの同じ傾向（意識的に設計されたのではないすべてのものを見下す傾向）が現れる・・・道徳の・・・領域では、同種の反論が挙がるのは、その合理的理由が明示的に論証されていないような一般的・形式的規則の遵守に対してである。しかし、すべての行動はそのすべての結果を完全に考慮した上で判断されるべきで、何らかの一般的規則によって判断されるべきではないという要求は、以下の事実を認識し損ねた結果なのである。すなわち、ただちに確認可能な環境に基づいて表現された一般的規則に従うことが、限られた知識しか持たない人間にとって、自由と必要最小限の秩序とを組み合わせ得る唯一の方法なのである。それどころか、形式的規則を一般に受け入れることが、

単一の意味による指導に代わる、これまで発見された唯一の選択肢なのである。その種のまとまった規則が一般的に受け入れられていることの重要性は、それらが合理的に設計されたのではないからといって減じるわけではない。受け入れられるチャンスが幾分でもあるような新しい道徳体系をこのように設計することが可能かどうかは、少なくとも疑わしい。また、我々がそうすることに成功していない以上、単にその便宜性が合理的に論証されていないからといって既存の道徳規則の受け入れを拒むこと・・・は、文明の根幹の一つを破壊することなのである。(出典：『ハイエク全集Ⅱ - 3「科学による反革命」』、春秋社、94 頁、95 頁、97 頁)

3 結語

私【ブログ作成者】が、この小論文において読者諸氏に訴えたかった最重要の主旨

――すなわち、合目的な自生的秩序（社会的制度や形成物）を（例え、個人の能力では意識的に理解できなくとも）常に保護して維持すること、またそれらの改善や改良においても見えざる自生的諸力を破壊・解体せぬように慎慮することが、諸個人の生命・自由・財産の保護および各個の目的（目標）達成の成否にとって、死活的に重要な意義を持つことを、21 世紀を生きる諸個人と政府（統治者）が強く再認識する必要があるということ――

の内容には、おそらく F・A・ハイエクの著書『科学による反革命』、『感覚秩序』およびカール・メンガーの『経済学の方法に関する研究』などの著書群中に発見される内容の域を出ないだろう。

しかし、自生的秩序（社会的制度・形成物）として体現されているが、見えざる形でその中に累積されている文明の叡智を保護することの死活的重要性を、今再び主としてハイエクの言葉を借りつつ、日本国政府と日本国民（否、願わくば、自由世界の諸国民）に対して、浅学な私【ブログ作成者】なりのやり方で簡略化と要約化して――それでもハイエクの哲学思想の本旨からは大きく逸脱せぬよう最新の注意を払って――提示したものである。

読者諸氏が、本小論の内容を理解し、日本国の伝統・慣習・法・道徳・言語などの諸制度や形成物を保護・維持することの重要性を知り、またそのことで読者諸氏自身の目的追求の成功に少しでも役立つならば、私【ブログ作成者】にとって大いなる幸いである。

【附録】 位相同型性（イソモルフィズム）について

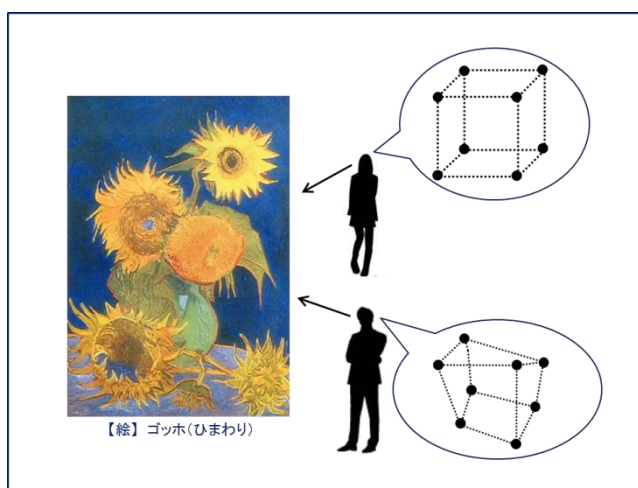
ハイエク曰く、

関係しあう要素のシステムが二つあって構造的な対応があり、そうした要素を結び付けている関係は同じ構造的な特質を持つという厳密に数学的な意味で使われて（使用して）、ゲシュタルト学派から直接に借用される意味とは違う・・・二つの構造のイソモルフィズムが、ゲシュタルト学派の議論のように、空間での配列の類似を暗示するわけではないことを知っておくことは特に重要である。二つの三次元構造が、この言葉の幾何学的な意味で類似していればこれも同型ではあるが、こうした空間的な類似は必要ではない。もしここに取りあげている関係が、例えば結合であって、結び目が要素を表すようなゴム紐の三次元ネットとか格子とかを考えるならば、イソモルフィズムはいくら引っ張っても、ねじっても、くしゃくしゃにしても変わらないであろう。この空間を歪める過程で、要素間の関係が変わらず、紐が切れることがなく、新たな結び目ができることもないならば、このネットもしくは格子の様々な状態はすべて同型であると言える。

イソモルフィズムを空間的な類似とは解さないことの重要性は、例えば、要素の位置が他の要素との結び付きによって決められるシステムでは、二つの要素が同じ位置を占めることがあり得て、このようなことは空間的な意味では明らかに不可能であることがわかるであろう。空間の 2 点は、そのどちらかが別の点に対して同一の空間的關係を持つことはあり得ず、「結合」という秩序

からのみ、二つの要素のどちらもが別の要素に対して同一の関係にある。このことは実は、個々の要素に適用されるばかりではなく、より大きな構造の中で結びついて要素の下位のグループにも適用され、その要素群は同型ではなくてもなお群とみなされ、大きな構造の中で同じ場所を占めることがあり、つまり、一群の要素として別の要素と同じ結びつきをする。こうして、**イソモルフィズム**は全体としての構造の類似と、構造の中での対応する要素の位置の類似のみを表すが、構造の中での位置を離れては、対応する要素のどのような特質を語るものではない（イソモルフィズムは、要素の位置関係のみにより、要素自体の特質とは無関係という意味。）構造を組み立てる要素の個々の特質は、二つの構造が同型であるかどうかという問題にはすべて関係がない。また、イソモルフィズムは、異なる材料からつくられる構造のあいだに存在するばかりでなく、要素を結びつける関係に共通の構造的な属性が存在するかぎり、物質的な構造と非物質的な構造との間にさえもある。（出典：『ハイエク全集Ⅰ - 4「感覚秩序」』、春秋社、48－49頁）

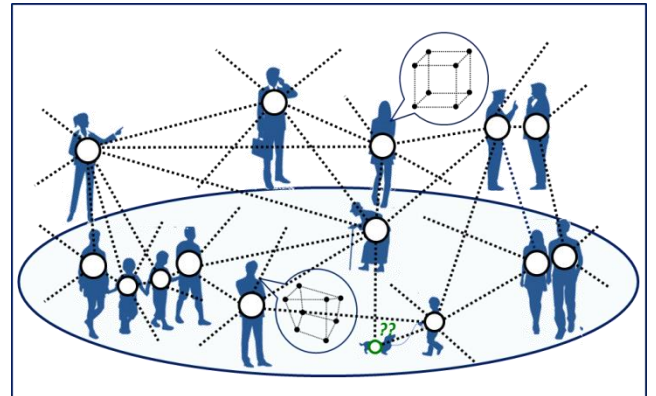
【参考１】位相同型性に関するイメージ図



要注意！：このイメージ図は位相同型性の概念を最も簡略化した形で説明するために私【ブログ作成者】が作成した基礎図であり、実際の複雑な人間の心の構成（心的秩序：神経インパルスの動的な分類過程、詳しくはハイエク『感覚秩序』参照のこと。）

は、このような単純な図で描き出すことはできない！

【参考２】 諸個人の心的秩序の位相同型性による社会的な関係網のイメージ図



要注意！：これも説明用イメージ図であり、実際には、諸個人の心的秩序や人間相互の関係網は複雑極まる構成であるためこのような単純な図で描き出せるものではない。

但し、このイメージ図において、絶対に間違っ理解してはならない点を３点だけ挙げておきたい。

①図では心的秩序と社会関係網の複雑さが異な（位相同型でないように）見えるが、これは複雑性（錯雑性）の全体および諸部分（側面）を図では描き出せないことの限界から来る。

②図は特定の人物が特定の時空間で、社会関係網図の特定の交点に位置（固定）されるという意味ではない。諸個人（の心）は自分の置かれた周辺環境の変化に応じて時々刻々と焦点（交点）間を移動していると考えるべきであろう。

諸個人が焦点（交点）間で入れ替わっても――例えば、職場の人事が異動しても、その職場の職務や構成は変わらず遂行され得るように、あるいは、時の流れとともに人間の世代が入れ替わって行くが、社会的諸制度や形成物の関係網は持続され得るように――関係網の構造（構成）の位相同型性は維持され得るであろう（関係網の意図的破壊者からの防御・防衛に努力する限りにおいて！）。

③諸個人の心に関係性の構造がある時ある場所で、「引っ張って見えても、ねじれて見えても、くしゃくしゃに見えても、位相同型性は変わらない

(同型ではあるが、同一ではない!) ののである。

今回の小論文では「フェミニズム」「(法・伝統・慣習・美德の上着を憎悪する) 人権思想」とそこから発する日本国の諸制度・形成物への破壊活動に触れることはできなかった。これらのテーマは、次回以降の小論で纏めてみたいと考えている。

ここでは中川八洋『教育を救う保守の哲学』の一節を引用して締め括りたいと思う。

中川八洋曰く、

現在の社会規範や、その母胎たる慣習の継承を阻む目的が達成できる。慣習や伝統が継承されては、マルクス主義の教理である、「人類の進化した〔と妄想する〕新しい社会」を創造できない。

法秩序的な社会規範にしる、倫理・道德上の社会規範にしる、それらは伝統と慣習に従う人々の紐帯において生命を得ている。子供の世代が親や教師から伝統や慣習を教育されないとすれば、法〔Law〕も道德〔morals〕もいずれの規範も、空中分解する。子供たちもタコ糸から離れたタコのごとくに、社会規範〔＝タコ糸〕から浮遊する個〔アトム〕となるから、それらの人格はアノミー〔無規範〕の自己破壊現象をきたし、動物化するし、中には犯罪者の道を辿る(者も出る)。

このように、人格が自己破壊して動物化した人間を「狂気の哲人」マルクスとエンゲルスは、「共産主義的人間」だと定義した。これらの人間によって文明の社会は維持されないから、崩壊せざるを得ない。一定以上の人間がアノミー化した社会を、仮に維持しようとするれば、その方法は強権的な全体主義しかあり得ないから、それは必然的に共産党による独裁体制の社会に移行する。これが、「子供の権利」条約のもつ危険性である。日本共産党が、この条約を金科玉条にふり回すが、それによって共産党の政権が遠からず日本に樹立されるからに他ならない。共産社会をつくる確実な方法として、マルクスは伝統や慣習の世代間継受を阻止〔切断〕することを考え、そのために家族の破壊を掲げ、アピールした。

『共産党宣言』を初めとして、マルクス主義の「家族破壊」にかかる情熱の激越さの理由はこれである。(中川八洋／渡部昇一『教育を救う保守の哲学』、徳間書店、290～291頁)



2016年1月2日(土)

日本国 兵庫県 神戸市にて記す。

by a Sakura--- Japanese cherry ---Burkean.